

市民のページ



「八重の桜」の撮影開始！

9月9日から15日まで、鶴ヶ城や日新館、会津武家屋敷などで大河ドラマ「八重の桜」の撮影が行われました。13日には、鶴ヶ城で記者会見が開催され、主演の綾瀬はるかさんをはじめ、西島秀俊さん、長谷川博己さん、玉山鉄二さんが出席し、撮影に向けての意気込みを語りました。(写真提供 NHK)

お届けします 「八重の桜」通信



2013年の大河ドラマで、会津藩士の娘・新島八重を主人公にした「八重の桜」が放送されることになりました。ここでは、新島八重に関する歴史やドラマに関連することなどを紹介していきます。

その9

八重と襄の出会い

新 島襄が帰国して落ち着いたのが、京都の宣教師ゴードンの家でした。この頃、八重は聖書を学ぶため、ゴードンの元に通っていました。ある日、八重がゴードンの家に行くと、玄関で靴を磨いている男がいました。八重はその男をゴードンの使用人だと思い、挨拶もせずに家の中に入りました。すると間もなく、ゴードン夫人から襄を紹介されました。これが八重と襄の最初の出会いです。この時はお互いに意識することはなかったようで、再び二

人が出会うのはもう少し後のことです。

八 重は、女紅場に勤務しているときに、京都府副知事の榎村正直を度々訪れ、学校運営に関する意見を申し述べています。明治の初めは、女性が働くことも珍しかった時代です。そのような時代、男性に、それも役人に対して女性が意見を堂々と述べることもなど考えられませんでした。

一方、襄は、学校設立のために何度も榎村を訪ねていました。ある時榎村は襄に「奥さんを日本

人から迎えるのか、外国人から迎えるのか」と訊ねました。すると襄は、「外国人は生活の程度が違つから日本の婦人をめとりたい。しかし、亭主が東を向けと言つたら3年でも向いている、東洋風の婦人は御免です」と答えました。そこで榎村は「それならば、度々注文を付けに来る八重はどうだ」と勧めました。

それから少したった夏の頃、八重は涼をとるために、中庭の井戸に板戸を渡して裁縫をしていました。その時、襄が覚馬を訪ねて来て、「妹さんは大変危ないことをしている。板戸が折れたら、井戸に落ちるではありませんか」と注意しました。すると覚馬は「妹はどうも大胆な事をして仕方がない」と答えました。襄は、この八重の大胆な振る舞いを見て、「常識にこだわらず、自分で考えて行動する女性だ」とほれ込んだそうです。

▼監修：会津歴史考房 主宰・野口 信一さん